

保育者養成課程における学びの集大成としての「理想の保育園づくり」：「保育実践演習」の授業実践と考察～

著者	下口 美帆，和田 幸子，山？ 玲奈
雑誌名	京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要
号	57
ページ	151-162
発行年	2019-12-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000953/

保育者養成課程における学びの集大成としての「理想の保育園づくり」 ～「保育実践演習」の授業実践と考察～

下 口 美 帆
和 田 幸 子
山 崎 玲 奈

I. 授業実践の背景と目的

1. 保育士養成科目「保育実践演習」について

「保育実践演習」は、平成 23 年度保育士養成カリキュラムの改正の際に新設科目として設けられた。保育に関する科目横断的な学習を行い、保育に関する現代的課題とその対応について学びを深め、学びを振り返り保育士として必要な知識・技能の習得を確認することを目標とし、保育士養成課程の最終学年を対象に開講された¹⁾。

当時、本学は短期大学部こども保育学科として保育士養成を行っており、「保育実践演習」では、学生は保育実践テーマごとに分かれて演習を行い、全体発表会と合評を行うことによって学びの集大成の機会としていた。その中で、乳幼児の総合的な表現活動の実際を体験すべく、総合表現の創作活動を行ったことによって、平成 27 年改組された四年制こども教育学部において「総合表現Ⅰ」「総合表現Ⅱ」「総合表現Ⅲ」の授業を立ち上げることに繋がっていった^{注1)}。

その後、平成 29 年に「保育士養成課程等の見直しについて（検討の整理）」によって科目の目標及び教授内容の見直しが行われた際には「保育実践演習」は、グループ討議、ロールプレイング等を活用して学びの振り返りを行うこと、現代的課題の探求を行うこと、自己の課題を把握すること、が内容として明示された²⁾。そこで本学においては、四年制こども教育学部 1 期生が最終年次を迎える平成 30 年度「保育実践演習」の授業構築を目指す必要に迫られたのであった。

保育士資格必修科目である「保育実践演習」の授業内容は、他校でも模索状態が続いた^{注2)}。幼稚園教諭免許必修科目である「教職実践演習」とあわせて、『保育・教職実践演習』として発刊されているテキストでは、すでに履修した科目内容と実習体験、現代的課題

について、ワークシートで学び、グループ討議をするためのポイントをまとめたものが見られる^{注3)}。

本学こども教育学部 2015 年入学生、4 年次後期科目「保育実践演習」開講に当たり、授業目標を 2 点あげた。1 点目は、保育に関する現代的課題についての分析、考察、検討を行うこと、2 点目は、自らの学びを振り返り、保育士としての必要な知識・技能を習得したことを確認すること、である。そこで、これらの目標に向けた授業内容として、グループでの「理想の保育園づくり」に取り組んだ。本稿ではその過程に焦点を当てて報告する。

2. 理想の保育園づくりについて

対象とする 2015 年入学生は、1 年次前期「こども教育概論」において、「理想の幼稚園・保育園」についてのグループ活動を行っている。この取り組みは、入学して間もない 1 年次の 5 月、授業の 2 回分を使って行われた。学生は当時、保育に関する専門的知識をまだほとんど持たない状態であったため、授業ではまず自分の通った幼稚園・保育園の楽しかったこと、楽しくなかったことを思い出し、その思い出を再現したり、改善したりすることによって、理想の幼稚園・保育園を考えて模造紙に表すという方法をとった。その結果、生み出された幼稚園・保育園は、学生が指摘するように、子どもの夢がたくさん詰め込まれた場所になった。例えば、「ゆめのようちえん」と名付けられた園では、「人工芝、田んぼ、畑、大きなアスレチック、おままごとルーム、大きなボールプール、トランポリン、大型つみき」など、子どもないし保護者にとって魅力的な施設・設備がたくさん示された。「四季幼稚園」と名付けられた幼稚園では、子どもたちが日本の四季折々をその場で体験できるよう、季節によって幼稚園が移動するという斬新なアイデアが提案された。授業

では、このようにさまざまな夢の幼稚園・保育園が紹介された後、教員が「こんな園を作りたい」という学生の願いをまとめて提示し、保育内容の5領域に合わせて分類してみると、園のある場所や園舎など、具体的な形をともなった「環境」に対する関心が最も高く、ついで「健康」、なかでも食育や運動への関心が高いことがうかがわれた。それに対し、同じ「健康」の中でも、生活習慣や安全に関わる内容についてはほとんど触れられなかった。また、子どもたちの「言葉」や「人間関係」「表現」をどのように育むのかという視点も少なかった。

4年次後期を迎えた学生らが、どのような「理想の保育園」を思い描くのか。そこには、これまでに学んだ保育の知識、問題意識、実習体験が反映されてくるはずである。さらには、保育職への就職を控えた時期であるゆえ、勤める立場で理想とする保育園をイメージするであろう。このように学び、体験を集約させて各自が持つ保育観を相互に照らし合わせることが「保育実践演習」において「理想の保育園づくり」に取り組むねらいである。

本授業実践のモデルとなったのは、横井らによる「保育内容総論」における取り組みである。横井らの勤務校では3年次後期に開講の「保育内容総論」を、保育を総合的に考える力を養う科目として位置づけている。その中で「幼稚園をつくろう!」と銘打ち、乳幼児期の子どもの望ましい経験を総合的に考え、それを具現化するための園環境、保育内容を設計、作成、発表するというワークショップを行っている³⁾。平成23年に保育士養成課程において「保育内容総論」が新科目に加わったのであるが、それに先んじて幼稚園教諭として保育を総合的に考える力を養う目的で「保育内容総論」を開講しており、この実践によって保育士養成課程としての「保育内容総論」の位置づけを探ろうとしたものであった。その後、保育士として保育を総合的に考えるカリキュラムへと発展していったかどうかは定かではない^{注4)}。

本授業実践では、「保育所」または保育所機能を持つ「こども園」として、学生らが理想とする園を考えることとした。「保育実践演習」が保育士養成課程の科目であることが大きな理由であるが、乳児から就学前の幼児が一日の大半を過ごす場はどのようなものかを学生が考える機会としたい。児童福祉施設の一つとし

て歩みを続けてきた保育所は、乳児保育の充実、幼児一元化、多様な保育ニーズへの対応、地域子育て支援の拠点といった現代的な課題を含んでおり、そのような状況の中で目指す保育のあり方を討議する機会としたいと考えた。

3. 本稿の目的

本学こども教育学部1期生である2015年入学生の、4年次後期科目「保育実践演習」の授業の実際を報告する。履修生は49名である。本稿の目的は、「保育実践演習」における学びの集大成の意義と課題を提示し、保育者養成教育における今後の課題を提示することである。

Ⅱ. 授業の概要と本稿の方法

本授業はこれまでの大学における学びと実習での学びを集大成し、それらをふまえた上で保育園の園舎、運営、保育内容などについて考え、考えたことをパンフレットと園舎模型として表現する「理想の保育園づくり」、自らの成長を振り返って木の絵として表現する「成長の木」、子どもの安心安全な環境とはどのようなものかを学ぶ「京あんしんこども館への学外見学と小児科医による研修」の3内容から成る。

本稿では、15回の授業のうち、「理想の保育園づくり」に関する12回の授業経過を報告する。この授業では教員によるレクチャー、グループ活動、グループ発表を行った。そして、グループで制作した保育園のパンフレットと園舎模型の評価と学生の振り返りをもとに、その考察を行う。

Ⅲ. 授業の実際

15回の授業構成は表-1の通りである。

本稿では「理想の保育園づくり」について表-1に示した1～12回目の授業内容について詳述する。「理想の保育園づくり」は「パンフレット制作」と「園舎模型制作」の2課題を同時進行で行った。

表-1 15回の授業構成

回数	日にち	内容
1	2018 年 9 月 27 日	「理想の保育園を作ろう」概要説明 グループ分け、ファイルづくり 多様な保育を知る～レッジョ・エミリアの DVD 視聴
		教員によるレクチャー
		学生の活動
2	10 月 4 日	新保育所保育指針について
3	10 月 11 日	園舎のデザイン
4	10 月 18 日	園の特色
5	10 月 25 日	レッジョ・エミリアの DVD 視聴
6	11 月 1 日	保育園の地域における役割
7	11 月 8 日	防災について
		全体活動
8	11 月 15 日	課題①②の完成・提出
9	11 月 29 日	パンフレット製本 パンフレット・園舎鑑賞会 発表準備・練習
10	12 月 6 日	発表会①質疑応答を含めて各グループ 20 分×4 グループ
11	12 月 13 日	発表会②質疑応答を含めて各グループ 20 分×4 グループ
12	12 月 20 日	発表会③質疑応答を含めて各グループ 20 分×1 グループ 「理想の保育園作り」まとめと振り返り
13	1 月 17 日	自らの育ちを振り返る～成長の木
14	1 月 24 日	京あんしんこども館見学 「子どもの発達と安全」
15		

1. 「理想の保育園づくり」の方法

(1) パンフレット制作

パンフレットは表裏表紙を含めて全 10 ページとし、それぞれのページに考えてもらいたい項目を記した小さなサイズの見本を配布した。記した項目は表-2 の通りである。

パンフレットの枠組みを上記のように設定した理由は、「理想の保育園」を考えることを通して、保育園が成り立つために必要な法律や構成要素について改めて認識してもらうことと、実習で見聞きしてきた活動や園の配布物の位置づけについて再確認し、その役割を意識したうえで、自分たちが大切にしたい保育内容や保育者としての願いについて考えてもらいたかったからである。

(2) 園舎模型の制作

パンフレットが「理想の保育園」のソフト面を表すものであるとすれば、園舎はハード面を表すものといえよう。その園が建っている場所やイメージ(明るい・元気な、水辺にある、自然が多い、園のテーマカラーなど)に添った色彩の台紙を選択し、その上に図面や

立体模型などそれぞれが考えた形式で模型を作成した。園舎は園の環境の大きな枠組みであり、園児の活動を促すものである。学生たちは中庭のある園舎、シンボルツリーを中心として広がる園舎、発表会や身体活動を行うためのホールを大きくとった園舎など、学生が大事にしたい活動が示された園舎を制作した。

各回の活動の最後には毎回振り返りシートを記入した。各回その日の活動をまとめ、その日の発見は何であったか振り返って考え、次への課題や目標を明確にする働きがあった。

2. 授業の展開

(1) オリエンテーションとグループ分け

第 1 回目(2018.9/27)の授業では、本授業の概要と 15 回の計画についてオリエンテーションを行ったのち、くじでグループ分けを行った。5～6 名のグループメンバーとし、9 つのグループ毎に、まずグループファイルを作った。各自の振り返りシート、制作案、資料をまとめるためのファイルである。その後、レッジョ・エミリア・アプローチによる保育環境の DVD を視聴した。

表-2 パンフレットの項目・内容

ページ	項目	内容や注意点
表紙	園名	園のイメージが伝わるようなイラストや写真など
1	園の概要	<p><記入例></p> <ul style="list-style-type: none"> ・施設名・設置主体・所在地 ・園長・職員構成・園児定員 ・クラス構成・敷地面積・建物面積・略図・保育時間・休園日 <p>…など、基礎情報として必要なことを書きましょう</p>
2	保育方針・保育目標	<ul style="list-style-type: none"> ・どのような方針で保育を行うか ・どんな子どもに育ってほしいか
3	保育の特色	<p>その園の特色は何でしょう</p> <p>例えば…環境（自然が豊富、特徴的な園舎…など）</p> <p>体験（行事、運動、絵本、音楽 …など）</p> <p>保育方法（異年齢保育、〇〇教育法…など）</p>
4	保育の内容	例えば…生活、遊び、健康、食事、体験など園の保育内容がイメージできるように書きましょう。また、それぞれの活動の意図（保育のねらい）が伝わるように書きましょう
5	一日の流れ（〇歳児の例）	一日の流れ（デイリープログラム）がわかるように、具体的に書きましょう
6	年間行事	<p>「行事」にもいろいろあります</p> <ul style="list-style-type: none"> ・入園式などの式典 ・音楽会、発表会、運動会、遠足など園の活動 ・七夕など季節を感じる、歳時記としての行事 ・健康診断、防災訓練などの健康・安全な生活を支える行事 など <p>何をどのように行うか考えましょう</p>
7～8 (見開き)	月 △組（*歳児）の おたより（見開き）	<p>「おたより」は保護者と園をつなぐものです</p> <p>その月の行事予定、園の取り組み、園児の様子、保護者へのメッセージなど、何をどのように伝えるか考えましょう</p>
裏表紙		最後まで情報を盛り込むか、余韻が感じられるような色やイメージを描くか…など自分たちで考えて作成しましょう

(2) レクチャーについて

第1回目オリエンテーション後、および第2回目から第7回目には、教員によるレクチャーを各回20～30分行い、その後グループ活動をするようにした。保育における今日的課題や学生に考えてほしいテーマ、これまでの授業では触れられなかったことをレクチャーの内容とした。（表-3）

マ、これまでの授業では触れられなかったことをレクチャーの内容とした。（表-3）

第1回目（9/27）、第5回目（10/25）では、海外の保育として、レッジョ・エミリアの保育についてのDVDを視聴した。レッジョ・エミリアはイタリアの

表-3 教員によるレクチャー

回	日にち	講題	内容
1	2018年 9月27日	海外の保育1	レッジョ・エミリア（イタリア）の乳児保育所の一日の内容についてのDVDを視聴した
2	10月4日	新保育所保育指針について	平成30年4月より施行されている新指針の改訂のポイントは、乳児保育の充実、幼児教育を行うことの強調、「災害への備え」の項の新設、「子育て支援」の章の新設、である
3	10月11日	園舎のデザイン	保育所設置認可等の基準に関する指針（平成20年）を参照し、園舎をつくる際の検討事項を提示した
4	10月18日	園の特色	保育の形態、保育環境設定の方法を紹介すると共に、特色のある保育、主義に基づく保育とその思想の概要について説明をした
5	10月25日	海外の保育2	レッジョ・エミリアの乳児保育所の施設図面とアトリエ空間についてのDVDを視聴した
6	11月1日	保育園の地域における役割	新保育所保育指針の第4章子育て支援、3.地域の保護者等に対する子育て支援の部分を取りあげ、実際の活動例を示した
7	11月8日	防災について	園における防災について、園児への働きかけ、環境整備、避難訓練、引き渡し等について説明を行った

都市であり、その乳幼児に対する教育は2001年と2011年にワタリウム美術館（東京）で紹介され、その特色的な方法で注目された。各園に「ペタゴジスタ（教育担当）」と「アトリエスタ（芸術担当）」がそれぞれ配置されていること、「プロジェクト」と呼ばれる時間をかけた創作表現活動、アトリエスタが構築する創作活動、子どもの様子を記録し、保護者に提示する「ドキュメンテーション」、中庭を中心とする園舎配置などに特徴がある。DVDを視聴した学生たちは、園児が自由にギターの弦を触っていることや食事の際に季節の植物などを子どもと一緒に飾ること、一つのテーマに沿って表現を重ね、深めていくプロジェクトの活動、中庭と保育室の関係、「光」をさまざまに取り入れていることなどに興味を持ち、新鮮な驚きを感じている様子が視聴後のレポートから伺えた。

第2回目（10/4）は「保育所保育指針」について取り上げた。保育所保育のガイドラインである保育所保育指針は昭和40年の初版以来、4回目の改訂版として新指針が平成30年4月より施行されたのであるが、本授業の履修生にとってはまだなじみが薄く、改訂のポイントを確認しながらグループ活動に取り組んでほしいと考えた。

第3回目（10/11）の「園舎のデザイン」については、保育所設置認可等の基準に関する指針（平成20年）を参考に、定員、開所・保育時間、0,1歳児室の基準、2歳以上児室の基準、遊戯室、便所、調理室、事務室、休憩室、職員用便所、手洗い、階段、バルコニーについての設置最低基準について確認した。その後、園舎をつくる際の検討事項として、土地、方角、日当たり、風とおしについて提示した。さらに、子ども主体の環境デザインの例として、仙田の遊び環境論を紹介した⁴⁾。仙田は遊びやすい空間構造として、回遊、安全、シンボル性、回遊に変化を富ませるための近道・広場・ポーラス（穴）があること、の提案をしており、これらを図と写真によって提示した。

第4回目（10/18）には、「園の特色」としてレクチャーを行った。自由保育、一斉保育、コーナー保育、異年齢保育といった、これまでに学修した保育の形態や保育環境設定の方法について再度確認した後、「特色ある保育」のキーワード検索で上がってくる保育方法の一覧を紹介した。また、宗教や、保育思想のような、さまざまな主義に基づく保育を紹介した。

第6回目（11/1）では保育園の地域における役割について取り上げた。平成30年4月より施行されている新指針では、「第4章 子育て支援、3. 地域の保護者等に対する子育て支援」の項目が新設された。授業においては基本的事項（保育所の特性（保育所の環境・保育士の専門性）を生かす、保護者・地域・家庭の実情を踏まえる、地域の関連機関との連携、プライバシーの保護、秘密の保持）について解説を行ったのちに、保育所を利用している保護者に対する子育て支援、地域の保護者等に対する子育て支援について、実際に保育園で行われている活動をそれぞれに対応させながら提示した。

第7回目（11/8）では新指針に「災害への備え」の項が新設されたことを受け、保育園における防災についてのレクチャーを行った。安全性を高めるための環境設定（家具の固定、ピアノの置き方など）、園児が自身を守るための体遊び、災害が起きた後の保護者への引き渡しなどの内容を提示した。

（3）グループ活動の実際

5～6名ずつ9グループに分かれて活動を行った。準備物としては、色画用紙（4つ切り・12色）、折り紙、色鉛筆、色ペン、ハサミ、のり、セロハンテープ、画板などの材料・用具を各グループに1つ以上は行き渡るように用意し、各グループが自由に使えるように環境を設定した。

実際の活動ではまず各自が持ち寄った過去の実習園のパンフレット等を見せ合う、インターネットでいろいろな園を調べるなどの情報収集や、これまでの実習でよかったことなどを出し合うなどの様子が見られた。教員からも数園のパンフレットや資料を自由に閲覧できるようにしていた^{注5)}。その後の話し合いで、出てきた保育内容から自分たちが何を重視して保育目標や内容に反映させていくのか方針が定められた。

次の段階ではパンフレットの各ページと模型制作の役割分担を決めて進めている様子であったが、適宜見せ合ってグループの方向性を確認していた。

（4）グループ発表の実際

①鑑賞会

9回目（11/29）の授業でパンフレットと園舎模型をグループごとに展示し、お互いの作品を見て鑑賞しあ

う時間をとった。その際、鑑賞シートを配布し鑑賞の視点として、「いいと思ったところ」「質問したいこと」「自分の子どもを入園させたいかどうかとその理由」「保育士として働きたいかどうかとその理由」の4つの観点を示しそれぞれ記入するようにした。

鑑賞会では、いずれのグループも他のグループのパンフレットと園舎模型に対して非常に興味を持って積極的にパンフレットを手に取り読み込み、園舎模型もよく見ていた。

②発表会

第10回～12回の授業で各グループ質疑応答含めて20分ずつの発表を行った。発表はグループごとに行い、パンフレットをスクリーンに投影しながら特徴的な部分を読み上げていくグループや、別途パワーポイントで資料を作成してプレゼンテーションを行ったグループがあった。

発表の後、質疑応答の時間がとられ、「なぜその園舎の形なのか?」「安全性は?」「保育者の人数は大丈夫なのか」などの質問が出たが、いずれのグループも答えることができおり、事前の考察の深さを思わせる場面が見られた。一方で、質問の答えを聞いてそれに対する議論はなく、一問一答式になっており、議論の深まりという点においては課題が残った。

(5) 各回の振り返り

その日の活動を振り返り、その後の見通しを持たせることを目的として、毎回「振り返りシート」を記入する時間を設けた。項目は「経験した活動」と「考えたこと・見つけたアイデア」とし、その日の学びについて事柄と思考を分けて記述できるようにした。また、最後に全体の感想欄を設け、各回の活動を俯瞰しながら、全体を通した振り返りを自由に記述できるようにした。

(6) 「理想の保育園作り」まとめと振り返り

第12回目(12/20)、最後のグループが発表を終えた後、まとめとして「理想の保育園づくりまとめ」のレポートを実施した。項目としては「a. グループ活動の中であなたは何を担当しましたか」「b. 保育園づくり全体を通して気づいたことや学んだことは何ですか」「c. 毎回のレクチャーから学んだことは何ですか」

「d. 感想などを自由に記述してください」の4項目を設けた。

Ⅳ. 考察

1. 制作にみる学生の学びと討議のポイント

9グループのパンフレットと園舎模型のうち、学生の学び、課題が明らかに見られる4グループを挙げて考察していく。

①「にじのこ保育園」パンフレット制作と園舎模型に見られる学生の学びと討議

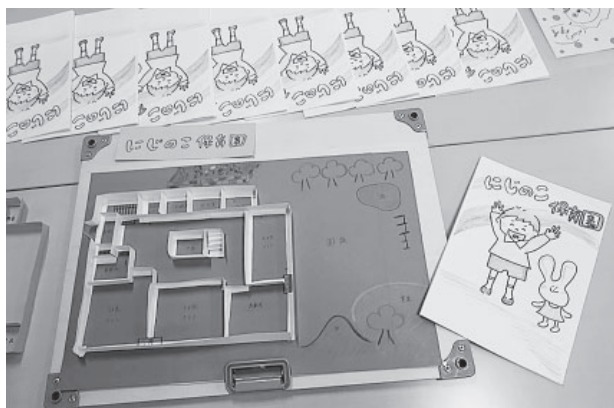
滋賀県大津市の琵琶湖西側にあるこども園という設定である。制作パンフレットで職員体制を園長以下、主幹保育教諭、保育教諭^{注6)}としていることからそのことがわかる。70名の園児を、琵琶湖岸の広々とした園舎で保育している。「子どもの目線」「一人ひとりの気持ち」といった表現で個性とその感受性を尊重する姿勢であることを表している。それは乳児保育において育児担当制^{注7)}を取り入れていることにも表れている。集団としての育ちを積極的に表す文言が見当たらないのだが、「異年齢交流」を行っていることから、異年齢の子ども集団での子ども同士の育ちを尊重していることがわかる。

園舎模型を見ると、中庭を取り囲むように1階部分に3,4,5歳児保育室があり各保育室から子どもは直接中庭に出たくなるような配置である。2階部分に0,1,2歳児保育室がある。5歳児保育室南側の園庭には丘があり、木々が植えられ、池があり、裸足で遊べる芝生のコーナーもあり、園庭から琵琶湖を臨める。豊かな自然の中、ゆったりとした保育を行おうとしていることがわかる。

中庭と園庭がつながっておらず行き来ができない場合、靴箱をどこに置くのが課題となることがわかる。にじのこ保育園の場合、玄関に靴箱があり、保育室からすぐに中庭に出たい気分があるにもかかわらず一旦靴箱まで行かなければならない状況であることに加え、園庭へ行く際の靴の着脱をどこで行うのかがイメージしにくい。つまり、子どもにとっての動線を考えるために、園児に見立てた小さな人形を園舎模型に載せて動かしてみるなど、模型活用のための手だてが必要であることが浮かび上がっていた。

パンフレットの「にじのこだより11月号」のペー

ジには運動会の記事が載せられている。その中に年長児による鼓笛隊の写真があった。これに関して、発表会討議ではなぜ鼓笛隊をしているのかとの質問があった。発表者からは、運動会を表す写真を貼り付けたとの説明であり、この保育内容を本園の特色として積極的に採用するのかということについての吟味が不十分なまま載せていることがわかった。行事の持ち方やその内容について保育者は無自覚ではならないのである。学生のうちには、無意識のうちに集団保育としての運動会のあり方のイメージが既にあるのではないだろうか。それについて疑問や問題意識を持つ必要があることを確認した。



資料1. にじのこ保育園 パンフレットと園舎模型

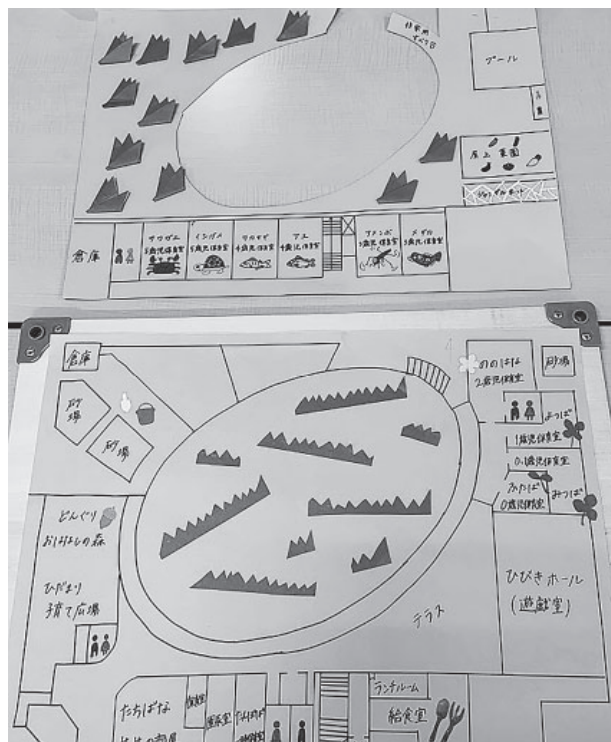
②「もくもくのきほいくえん」パンフレット作成と園舎模型に見られる学生の学び

滋賀県大津市の湖東にある園児200名という設定である。園長にはグループメンバー1名の名前が書いてある。保育の特徴は「広大な園庭の他に山や川を所有しており地域の自然を取り入れた保育を展開しています」とある。芝生が広がり、室内で遊べるジャングルネット、屋上菜園、広いテラスを持ち、思いっきり走りまわれる構造であることをアピールしている。保育の内容は「遊び」「食育」「自然」を根幹とし、チーム保育と称して異年齢保育の機会を大事にしている。砂遊び、泥遊び、アスレチックのイラストをちりばめ「山にも川にも泥にも」「たくさん触れよう」という言葉を載せ、だいこんほり、おにぎりづくり、カレー作りのイラストページには「自然がいっぱい」という言葉を挿入している。

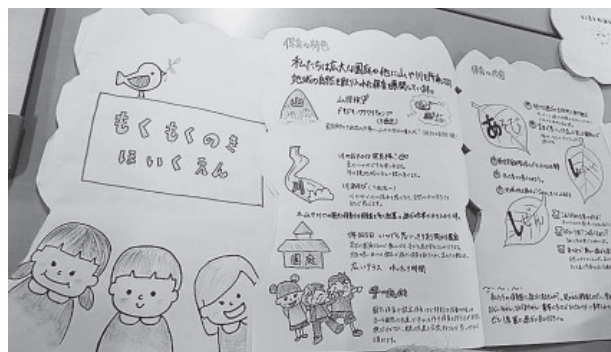
1階には0, 1, 2歳児保育室と遊戯室、絵本室、ラン

ぐに出られるようになっている。中庭の周りは回遊できる。中庭の横にはたっぷりとしたスペースの砂場がある。2階は3, 4, 5歳児保育室が各2クラスずつ、計6室横並びに配置してある。2階から1階へのすべり台があり、避難用として設置していることがわかる。トイレが5歳児保育室横にあり、数が少ないことと、子どもたちの動線をどのように想定しているのかが気になる。

発表会討議では、園長の年齢についての質問があった。パンフレットの園長欄に名前を記された学生が「40歳代で、これまで公立園で勤務してきて、本園に園長として来ました」と答えた。保育者としてのライフコースの一つのイメージとして提示していると考えられる。



資料2. 「もくもくのきほいくえん」園舎模型



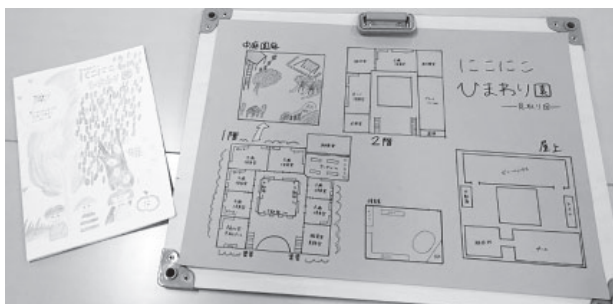
資料3. もくもくのきほいくえん パンフレット

③「にこにこひまわり園」パンフレット作成と園舎模型に見られる学生の学び

東京都港区芝公園にある園児 150 名の保育園の設定である。「表現が豊か」「感性が豊か」「明るくて元気」「考えて行動する」「コミュニケーション力」「思いやる心」が目指す子ども像である。保育の特徴の一つ目は「環境」として、開放感のある園舎、広い敷地、屋上、プール、お茶室、畑、遊具、ホール、中庭、絵本室、大きな水槽を挙げている。都会の中心にある公園の木々の四季の移ろいを楽しみながら保育園の生活が続いていることが感じられる。二つ目は「異年齢保育」として、具体的に異年齢で交わる時間帯を挙げている。三つ目は保護者からの要望で始めたという「課外教室」である。スポーツ、英語教室、音楽教室、プール教室があがっている。

1階に3, 4, 5歳児の保育室を配置しており、中庭で異年齢がよく出会うであろう事が察せられる。また、ランチルームが設置されている^{注8)}。しかし、本グループ内でのランチルーム設置の目的や利用方法についての意見の練り合わせは充分ではなく、全体討議に活かすことができなかった。

討議では、課外教室を行う意義について話し合った。園の特徴ともなる内容であり、保護者の求める部分でもある。しかし、子どもにとって適切な内容なのかという問題意識があがったものの、時間も十分になく討議を深めるには至らなかった。その後、グループメンバーの一人は振り返りシートで「特色ある保育は誰のためのものなのか」ということがとても印象に残りました。小さいうちから多くを経験させたいという思いで今回の園づくりをしていたので、もう一度『本当に子どもにさせたい保育』を考え直す必要があると思いました」と記した。この気づきは重要であると考えられる。乳幼児期の保育は就学を鑑みて行うのではなく、乳幼児期独自の生活や経験を充実すべく整えていく必要が



資料 4. にこにこひまわり園 パンフレットと園舎模型

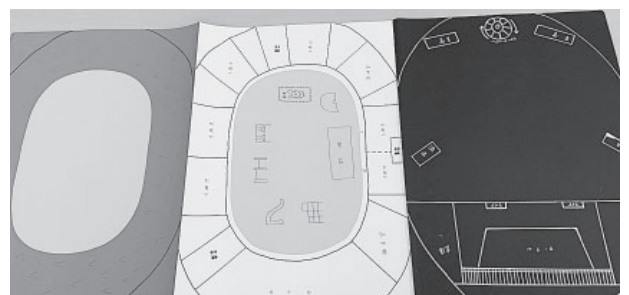
あるという視点を、保育者が常に持ち続けることへの気づきが見られるからである。

④「リトルスターナースリー」パンフレット作成と園舎模型に見られる学生の学び

京都駅近くで朝7時から19時まで開園しているという設定である。110人の園児は、0歳児6人を2人の保育者で、1歳児12人を2人で、2歳児12人を2人で、3歳児20人を1人で、4歳児30人を1人で、5歳児30人を1人で担当するとなっており、国の基準のとおりの設定で記している。0, 1, 2歳児には1人、3, 4, 5歳児1人、それぞれにフリー保育士が配置されている。

本園は、一人ひとりがリーダー、自分の意見が言える子、表現力豊かな子、仲間とチームワークを築くことができる子、を目指す子ども像として、「0歳から始める音楽・演劇教育」を特色として挙げている。劇団と提携し、地下に設置した音響装置付きの舞台での観劇やワークショップが行われる。園外へ観劇に行く機会も多い。園だよりも記載されているように「普段から演劇活動や表現活動に取り組んで」おり、一人ひとりが気持ちを表現できるための方法として演劇を積極的に取り入れている。しかし一日の流れの中には表現活動については書かれておらず、日々の生活の中でこつこつと取り組んでいる様子は読みとれない。むしろ、園庭で飼育しているうさぎとのふれあいや、栽培の方が「おたより」に子どもたちのエピソードと共に記され、生活体験として定着していることがわかる。

保育園の特徴として提示されている演劇であるが、地下の劇場の設定については、避難経路の確保が課題として残るであろう。



資料 5. リトルスターナースリー 園舎模型

2. 理想の保育園づくりを通した学生の学び

(1) 鑑賞シートから見る学生の学び

鑑賞シートでは「いいと思ったところ」「質問したいこと」「自分の子どもを入園させたいかどうか」「保育士として働きたいかどうか」を鑑賞の視点として設定した。これは、パンフレット、園舎模型を制作時は当事者（保育者または経営者）として取り組んできたが、鑑賞時にはそれを客観的に見て判断するものとして、園を利用する保護者の視点と働く保育士としての視点といった異なる視座を持って鑑賞・考察してもらいたかったからである。

実際に鑑賞シートに表れてきた学生の記述を見ると、「いいと思ったところ」には、保育方針・保育目標への共感、育児担当制、コーナー保育、異年齢保育、裸足保育、絵本や音楽の取り組み、食育の実施などの保育内容、自然の豊かさ、設備等の環境面の良さが上がっていた。

「質問したいこと」ではなぜ平屋づくりなのか、ガラス張りは外から見えないか、階段の位置について、玄関の場所はなぜそこなのか、といった建物ならびにその動線にかかわる質問、自然活動の見守りはどうするのか、琵琶湖や川の水は衛生的に大丈夫かなど活動の安全性に関する質問、コーナー保育に子どもが集中したらどうするのか、どうやってクラシックなどに興味を持たせるのか、クッキングはどこでどうやってするのかという運営面の質問、各クラスの職員の人数は何人かなどの職員体制への質問が多かった。

「自分の子どもを入園させたいかどうか」では、入園させたいという理由としては、自然とのふれあいや環境面が最も多く、次に異年齢保育や保育者が多いことによる人とのふれあい、体験の多様さなどの保育内容、防災訓練や食事が無添加などの安全性、と続いた。「させたくない」という意見の理由としては、体験が多くて子どもがついていけなさそう、安全面での心配が上がっていた。

「保育士として働きたいかどうか」では、働きたい理由として保育方針や目標と自分の考えが合致しているというものが最も多く、次に労働時間・休暇・休憩室の存在などの労働環境と続き、チーム保育などの保育士間の人間関係、子どもとの関わり、自己の成長可能性などがあがっていた。働きたくない理由としては、時間・人数等の労働条件が厳しそう、ピアノが苦手、

園児数が多くて目が届かない、行事が多くて大変そう、などの意見があった。

全体を通して、これまでの大学で学んだことや実習を積み重ねてきてよかったと感じた活動や、学生の関心事、価値観がかいまみえる結果であった。また、質問の項目も書き込まれていることや肯定的・否定的両方の意見が出てきていることから、学生に「読み解く力」「問いを持つ視点」が育ってきていると思われる結果であった。

(2) 全体の振り返りから見る学生の学び

全体の振り返りシートのうち、b.「保育園づくり」全体を通して気づいたことや学んだことは何ですか、c. 毎回のレクチャーから学んだことは何ですか、の2つの問いに対する記述から学生の学びを考察する。

b.「保育園づくり」全体を通して気づいたことや学んだことは何ですか、の問いに対して、「根底として保育指針に従った内容」「職員人数や環境設定などをもう一度見直し」認可保育園として基準を満たすことの必要性を実際に園づくりをする中で学んだ。その際、「実習した園のパンフレットを参考に」することもあった。グループ活動の中で、「子どもにどう育て欲しいのかという思いや願いをもとに園庭や園舎、保育内容が決められ」「園舎の構造は保育目標に関連づいている」ことに気づき、園舎と保育内容が有機的に関連しあうことを学んだ。また、「本当に存在できそうな理想の園づくりになった」「こんな園だったら働いてみたい」との記述から、学びに基づいた理想を論じ合えたプロセスであったことが伺える。そして「保護者が園について知る一番初めのものがパンフレット」であることから、方針や内容を明確に意識して載せる必要があることにも気づいている。学生らは「子どもを主体とする」「遊びこむことを乳幼児期に充実させる」「食育や自然とのふれあい」を追求したいと自らの保育観を定め、表している。自然とのふれあい、子どもが主体、のびのび、といった保育の大切さを4年間で学んだのであろう。

「動線を考えて」「防犯のこと、日光や風通しも生活の場として大切なのだと改めて学ぶことができた」との記述からは、子どもが一日の多くの時間を過ごす場として整える必要性について理解したことがわかる。「子どもにとっても保育者にとっても保護者にとって

も過ごしやすい園をつくることが大切」であり、それぞれの立場で保育園のあり方を考える機会となったことが推察される。

また多くの学生が取り上げたのは、特色ある保育は誰のためのものかということである。「保育の特色としてある活動を取り入れることは子どもにとって本当に良いことかよく考えてから取り入れる必要がある。例えば英語を保育に取り入れる時、それは小学校の勉強につなげるためという理由は子どものためではないということに改めて気づいた」との記述は、小学校入学をゴールとするのではなく、乳幼児期の充実そのものを目指したいという問いかけをしたものであり、重要な問題意識を持つことにつながった。

1 年次前期の「こども教育概論」で考えた「理想の幼稚園・保育園づくり」を思いだし、「1 年生の時よりもっと具体的でしっかりとした園の紹介ができていた」「4 年生で改めて保育園を作る中で、大学に入ってから保育園の様々なことを学んできた」と振り返ることができた」と自らの成長を記した学生もいた。大学での学びや実習での体験を通して、学生が子どもの発達について体験的に理解し、乳児という最も小さな子どもの視点についても想像し、保護者の願いにも配慮することができるようになった。1 年次に光の当たりにくかった子どもの「人間関係」に着目すると、今回、異年齢保育、担当育児制などに言及するグループが見られ、学生の成長が感じられる。

c. 毎回のレクチャーから学んだことは何ですか、との問いに対しての記述を挙げる。「レッジョ・エミリアの DVD を見て、もっと自由な発想もあっていいんだと気づいた」「子どもはこんな風に遊ぶのかと勉強になった」とあるように、海外の保育実践を見ることで視野を広げるきっかけになった。また多くの学生が、風通し、日当たり、それらの季節や時刻による変化とそれらを生かした保育環境づくりについて、印象深く学んだことがわかる。これらは学生にとって新たな学びとなった。さらに安全や防災は最優先に考えなければならず、状況別の対応や子どもへの伝え方を学んだ。このように、レクチャーによって新たな学びを得た。

V. まとめ

1. 全体的考察

多くの学生が、面白い授業であったと答えている。その理由は、これまでの学修や実習で学んだことを確認し、またこれまで知らなかったことをレクチャーや資料から得て、一から園づくりを協同的にいきなり形に表す過程の面白さを感じたことである。このような授業は初めての体験であったといえる。また、保育者になる日を間近にしている学生にとって、自分の身に引き寄せて、自分自身もよい保育を創り出していく存在であることを意識するときであったであろう。保育に関わる夢を語り合う機会となった。

本授業の意義を整理しておきたい。第一は、理想の保育園づくりを通して、法基準に照らし合わせをしながら保育方針、目標、子どもへの願いと保育内容の見直しを行ったことである。保育の内容というのは、ねらいを具現化させるための手だてである。子どもたちへの理解を深め常に保育内容を見直していくのである。

第二は、在園期間にわたる子どもの育ちを考える機会となったことである。保育指導案作りや模擬保育が一日の保育の立案であるのに対して、本授業では数年にわたるねらいをもった保育の展開をイメージした。長期保育計画の立案につながる体験であったことは貴重である。

第三は生活の場としての保育環境づくりへの気づきがあったことである。乳児期から一日のほとんどの時間を過ごす保育園は、養護と教育が一体となった保育を保証する場である。食事、睡眠、排泄といった健康を保つための営みを保育者とともにいきなり、そこで育まれる愛着関係を基として社会性を拓いていくのである。子どもにとって心地よい生活環境となるように、ランチルームの設定やトイレの位置、靴箱の位置の配慮など具体的にシミュレーションする機会となった。このことはこれまでの授業では体験しにくいことであった。実習園ではその環境設定から学生は学びを得てきたものの、自らが環境を創り出していく主体であるという意識は持ちにくかった。主体的に保育環境を考え、そのアイデアを立ち上げることによって、他のグループのアイデアに対しても問題意識を向けられるようになった。

第四は園舎設計を考える機会を得たことである。今回の発表では中庭のある園舎づくりをしたグループが複数あった。レジオ・エミリアの保育環境や回遊できる環境の意義、日当たりや風通しについてレクチャーで学んだことを形に表したものと推察される。子どもの立場に立って子どもが楽しいと思えるような保育空間を精一杯に考えたことだろう。このような学修は4年間で初めてであり唯一である。今日保育界を見渡すと、園舎改築や新規園の建築が相次いで行われている。園舎建築は保育における現代的課題ともいえる。そこで保育者として子どもたちのありのままの姿に添った園舎づくりに貢献すべく意識を持つことができた意義は大きい。また、この経験は園舎を建築する際にとどまらず、将来、保育者となって保育活動を行う際に、園舎構造を俯瞰で捉えながら理解し、その中で暮らす子どもの動線、保育内容、保育室、コーナーのレイアウトの有機的な往還関係を考案する際に有用な視点となる。

第五は、子どもに与えたい環境、子どもに経験してほしいことを、保育者、経営者の立場から考えることができたことである。各保育園は社会の要請を受けて保育方針を定めていく。保護者への支援も求められる。今回の活動の中で、本当に子どもにさせたい保育は何だろうと問いかけを持つことができた。この問題意識を保育者は常に持ち続け、保育を見直していく必要がある。そのことによって、子どもにとっての最善の利益の尊重へと向かう可能性を見出せるからである。

2. 残された課題

子どもにとって、そして保育者にとって居心地がよい保育の追及が求められる。そのような園づくりを目指す今後の本授業運営上の課題は、筆者ら授業者が、子ども主体である保育実践に敏感になり、学生に紹介できる保育実践の資料の収集に努めることである。そしてグループ活動の際の参考としていくことである。また、室内環境を考える際には、食事の場、排泄、手洗いの場、午睡の場を行き来する動線をシミュレーションしながら進められるような工夫を考えたい。そして、できあがったパンフレット、園舎模型を用いての発表会の持ち方について、討議が深められるようにさらに工夫をしていきたい。

環境を通しての保育、と謳われているものの、保育

内容と園舎および保育環境との有機的な関係について保育者養成教育において学ぶ機会を創出する課題があることが浮かび上がってきた。その授業構築に向けて、今後も筆者らは取り組んでいきたいと考えている。

注

- 1) この過程は『保育者養成における領域「表現」へのクロスカリキュラム導入に関する検討』平成26～28年度文部科学省科学研究費助成金（基盤研究C）研究成果報告書（課題番号26381297）智原江美・鍋島恵美・和田幸子・田中慈子・下口美帆 2017年3月に記している。
- 2) 栗原ひとみ「『保育実践演習』における学生の実践力養成について―出前保育を通して―」『植草学園大学研究紀要』第8巻.2016.pp.95-105 では幼稚園・保育園の一定時間の保育を請け負い、園の保育目標に寄与する活動の提供をすることによって学びの集大成としている。
- 3) 小櫃智子他『保育教職実践演習：これまでの学びと保育者への歩み』では、保育者への歩みと足跡、子ども理解の方法と実際、気になる子どもの行動の理解と対応、教育課程および全体的な計画を考える、保育内容と保育方法の研究、協同的な学びと育ちへ、および他6つのテーマで、個人、個人からグループ、グループ、で検討する課題をワークシートにして挙げている。
- 4) 幼稚園教諭免許、保育士資格の両方、またはいずれか一方を取得できる課程を保育者養成課程と呼ぶ。幼稚園教諭免許取得のためには教職課程の科目を履修する必要がある、保育士資格の取得のためには保育士養成課程の科目を履修する必要がある。「保育内容総論」は教職課程かつ保育士養成課程の科目である。「保育実践演習」は保育士養成課程の科目である。
- 5) 東京こぐま保育園『きょうだい保育の園舎づくり』ケーヨン③『のびのび子育て』他を資料として閲覧できるようにした。
- 6) こども園は、学校教育と保育を一体的に提供する施設であるため、その職員である「保育教諭」については、「幼稚園教諭免許状」と「保育士資格」の両方の免許・資格を有していることを原則とし

ている。

- 7) 複数の保育者と複数の子どもが同時に生活する場面において、一人一人の子どもが十分に保育者との意思疎通が図られるよう、その子どもに関わる保育者を担当として特定化する方法を育児担当制と呼ぶ。乳児保育において食事、排泄、睡眠に関する場面で導入している園が見られる。特定の保育者との継続的な相互作用により人への信頼感が形成されることを、人間としての育ちの基盤と考える保育理論による。
- 8) ランチルームを設けることによって、保育室の活動を中断させることなく、配膳の準備が可能となる。クラスで一斉の食事ではなく、各々の子どもが食事のタイミングを選ぶことも可能となる。

引用文献

- 1) 厚生労働省保育士養成課程等検討会「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）」2010年3月24日
- 2) 厚生労働省保育士養成課程等検討会「保育士養成課程等の見直しについて（検討の整理）」2017年12月4日
- 3) 横井紘子、上垣内伸子「保育を総合的に考える力を養う『保育内容総論』とは—グループワークによる体験型授業『幼稚園をつくろう！』の検討を通して—」『全国保育士養成協議会第51回研究大会研究発表論文集』2012年、pp.476-477
- 4) 仙田満『環境デザイン講義』彰国社 2006年、pp.123-124

参考

- ・レッジョ・チルドレン、ワタリウム美術館、グループ現代 DVD『子どもたちの100の言葉 レッジョ・エミリア市の挑戦』（2001年にVHSで発行されたものを2012年にDVDとして再録）
- ・レッジョ・チルドレン、ワタリウム美術館 DVD『レッジョ・エミリアの幼児教育』2011年
- ・厚生労働省『保育所保育指針』平成年29年告示
- ・坂本廣子『子どもと一緒に防災の本』フォーラムA 2013年

・アベナオミ『被災ママに学ぶちいさな防災のアイディア 40』学研プラス 2017年